

大体育大

発行責任者
大阪体育大学広報室
室長 大坪 康巳
編集長 長 大坪 康巳
大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1
電話 (072) 453-7021
FAX (072) 453-8818
協力=教育後援会・学友会

第46号
陸上競技部

第110回日本陸上競技選手権大会

陸上日本一を競う日本選手権を大体育大が席巻した。名古屋市のパロマ瑞穂スタジアムで6月12〜14日に行われた同選手権の女子砲丸投げで坂ちはる(スポーツ学部2年、大阪体育大学浪商高校)が日本歴代8位タイ、学生歴代7位、関西学生新記録となる16.07で大会2連覇を果たした。日本選手権・混成競技(6〜7日、岐阜市)でも昨年の日本インカレ2位の山本湧斗(体育学部4年、兵庫・明石商業高校)が十種競技で73.35点をマークし、2位に。U23アジア選手権(7月9〜12日、中国・オルドス)の日本代表に選ばれた。

陸上 日本選手権 大体育大 十種愛



山本準(十種)
オランダ選手権



十種競技の「無敵」山本準選手

山本は「目標のメダルを取れたのは良かった。でも、試合展開的には優勝も狙えた」と振り返る。初日は砲丸投げで自己記録を約60センチ伸ばし、走り高跳びでも自己ベスト。1位と約10点差の2位に折り返した。2日目は100メートル障害、円盤投げで自己ベストを記録したが、高得点を狙った得意の棒高跳びは土降りで思ったような記録が出なかったという。



今後の目標は日本インカレ優勝と関西学生新記録の更新で、卒業後も競技を続ける。「引退するまでは絶対に2000点を狙いたい」。キングへの道を歩み続ける。

山本は「目標のメダルを取れたのは良かった。でも、試合展開的には優勝も狙えた」と振り返る。初日は砲丸投げで自己記録を約60センチ伸ばし、走り高跳びでも自己ベスト。1位と約10点差の2位に折り返した。2日目は100メートル障害、円盤投げで自己ベストを記録したが、高得点を狙った得意の棒高跳びは土降りで思ったような記録が出なかったという。



坂2連覇
クイーン
砲丸

1投目、坂は砲丸を持って構えた手に、震えを感じた。昨年は無欲の日本選手権だったが、今年は覇者として守る立場。久しぶりの緊張感があった。1投目で16.07。昨年の日本選手権で記録した自己ベストを29センチ更新した坂はめっちゃ緊張したのがよかったのかも知れないと振り返る。昨年の日本選手権以降、「もう一度あの舞台でベストを投げたい」という思いでトレーニングを繰り返してきた。

緊張を味方に自己新
を日本選手権に合わせた。思いが結実した。

しかし、2投目、3投目は記録が伸びなかった。中西隊真投でロック監督からの「3投目が終わったら上位8人の発表を時間ができる。リラックスして」とアドバイスされた。ゆっくりの盛り、ラムネを食べて気持ちを切り替えた。その4投目で記録をさらに2センチ伸ばし、1投目で適度な緊張を高いパフォーマンスにつなげた。4投目で「座る」リズムで、心や体の状態を普段の状態にリセットして、連覇を達成した。

今年のオフは体づくりに取り組み、ベンチプレスは1年時の80キロから100キロ上がった。また、今季はのバレーを活かし切った。日本学生個人選手権2位、静岡国際3位など勝てない試合が続いて強化したバレーを効率的に強化した。中西監督との確執、点検を繰り返していた。

坂にとっての大きなアドバンテージは日本選手権12位の中原鈴(体育学部4年、東大阪大学敬愛高校)、17位の武田光里(体育学部4年、奈良・添上高校)とのトリオ出場だ。試合中はもちろん練習、移動

される。山本は「走る、投げ、跳ぶをすべてこなせてこそ本物のチャンピオン。他の十種競技の選手たちにはない。大会でも、一つの「儀式」がある。選手たちが輪を作り、ランニングシャツを一言に空に投げ上げる。「十種は記録を築くよりも、まずはやり遂げることが大事だと昔から言われている。始まった理由は分からないが、健闘を称えるメッセージ」。山本の十種愛は深い。U23アジア選手権では初のチャンピオンユニホームに袖を通す。

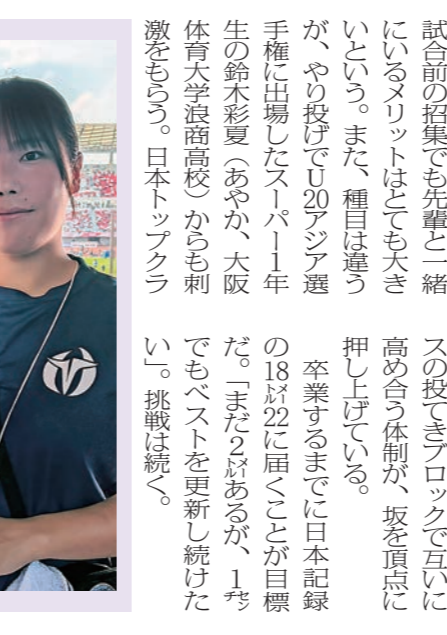


左から坂ちはる・武田光里・中原鈴

また、メンタル面も成長した。当初は全種目を種を出そうとし、最初の種目で失敗すると落ちこんでいたというが、「今は次で取り返せばいいや」と思うようになった。試合を重ねるにつれ、自然と前向きな思考になった。

種目間のインターバルも短く過密な戦いを乗り切るのか。出場している選手たちで励まし合う。跳躍で誰かが跳んだらみんな喜ぶ。ラバルという仲間のたちで

す。最後の1500メートルは暮れ時や夜間にすればいいことも多い。10種目を戦い切った十種競技の選手たちには、大会でも、一つの「儀式」がある。選手たちが輪を作り、ランニングシャツを一言に空に投げ上げる。「十種は記録を築くよりも、まずはやり遂げることが大事だと昔から言われている。始まった理由は分からないが、健闘を称えるメッセージ」。山本の十種愛は深い。U23アジア選手権では初のチャンピオンユニホームに袖を通す。



女子ハンマーも4位入賞
投げ川島も4位入賞

日本選手権では、女子ハンマー投でも川島空(体育学部4年、大阪体育大学浪商高校)が、61.03の関西学生新記録をマークし、4位入賞を果たした。川島は昨年の日本選手権は55.13位で、今年、日本選手権初入賞。今年5月の関西インカレは59.15位。「やっと関西学生記録を投げる事ができて、とてもうれしです。3位まであと7センチ悔しい結果にはなりませんが、今回は自分をほめたいと思います」と喜んだ。



橋本、奮起の8強 優秀選手 戸田8強 優秀選手賞獲得

剣道部

関西学生剣道選手権大会

第74回関西学生選手権大会が4月26日、大阪市のおおきにアリーナ舞洲で開催され、剣道部男子は戸田翔海(かける、スポーツ科学部3年、埼玉・本庄第一高校)が5勝で8強に進出、初の全日本学生剣道選手権大会出場権を獲得した。



戸田翔海(スポーツ科学部3年、埼玉・本庄第一高校)

男子

戸田は初戦から集中力を切らさず相手に対応し、面を中心に5戦を勝利。準々決勝では惜しくも立命館大学の選手に敗れたものの、自身の目標だった初の全日本インカレ出場権を獲得し、優秀選手賞も受賞した。戸田は「試合中に集中力が途切れず戦えたが、気を取り直してやられてしまった。満足できる剣道ではないので精神面を鍛えていきたい」と飛躍を誓った。

女子

第56回関西女子学生選手権大会が4月26日、大阪市のおおきにアリーナ舞洲で開催され、剣道部女子は橋本凛音(りの、スボ科学部2年、兵庫・甲子園学院高校)が8強に入り、橋本を含む2名が7月の全日本女子学生剣道選手権大会出場権を獲得した。

関西学生剣道選手権大会

橋本は4年生・交代で約4日前に出場を告げられる予想外の抜擢。期待に答える勝利準々決勝で関西学院大学の選手に惜敗したが、ベスト8に進出した。自身初の全日本女子選手権出場権と

優秀選手賞を獲得し

一先置や先生方に教わったことを思い出して戦った。目の前の試合に集中して、全日本選手権出場は貴重な時間なので、自分らしく戦う」と気込みを語った。

また、原那月(スポーツ科学部3年、福岡・福岡高校)は勝ち進んだが、気持ちは切り替え敗戦直前に臨み、橋本とともに全日本選手権出場を決めた。さらに今枝琴(いまし)こと、体育学部4年、和歌山県立大学は初戦で敗れたが、体格が大幅に上回る相手に、延長に次ぐ延長で約30分の熱戦を繰り広げた。

今年度から剣道部女子監督も務める村上重多監督は「橋本は迷いなく技を出せるのが持ち味で駆け引きを覚えるのもっと良くなる。原はチームの大将を務める実力者が、あそこで粘り勝ちしたのは大きい。今後は相手は打たせない守備力が高いので、限られた時間内で一本を取る決定力をつけたい」と良くなる」と評した。

今後は夏の全日本女子学生選手権大会、秋の関西女子学生優勝大会へ大会が続くが、



橋本凛音(スポーツ科学部2年、兵庫・甲子園学院高校)



原那月(スポーツ科学部3年、福岡・福岡高校)



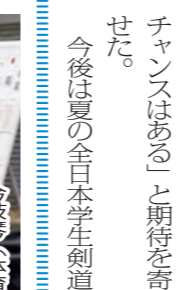
今枝琴(体育学部4年、和歌山県立大学)



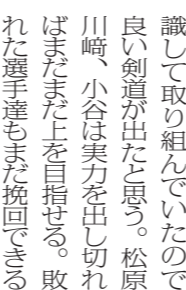
川崎幹太(体育学部4年、宮崎・日星学院高校)



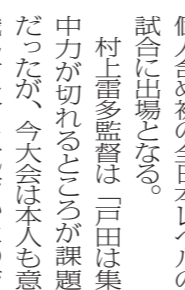
小谷登(スポーツ科学部3年、福岡第一高校)



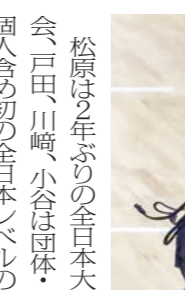
松原正明(体育学部4年、大分・明豊高校)



村上重多(監督)



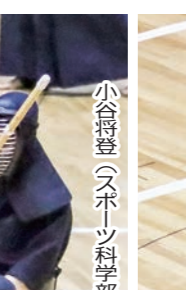
戸田翔海(スポーツ科学部3年、埼玉・本庄第一高校)



川崎幹太(体育学部4年、宮崎・日星学院高校)



小谷登(スポーツ科学部3年、福岡第一高校)



松原正明(体育学部4年、大分・明豊高校)



村上重多(監督)



戸田翔海(スポーツ科学部3年、埼玉・本庄第一高校)

全日本インカレ 準優勝相手に激闘 関西大会ベスト8 全日本で2勝

柔道部

関西学生柔道優勝大会 / 全日本学生柔道優勝大会

柔道部男子は5月の関西学生柔道優勝大会でベスト8、6月に東京で開催される全日本学生柔道優勝大会に出場を決めた。



男子は2回戦(人制)で関西学院大学と対戦。先鋒・藤江星七(せな)とスポーツ科学部2年、東海大学付属大阪仰光高校)が開始19秒に背負い投げで一本勝ち。次鋒・江川凌介(あき)とスポーツ科学部3年、香川・英明高校)は敗れたが、大将・中川五将・池田孝輔(体育学部4年、山口・教育学部4年、山口)

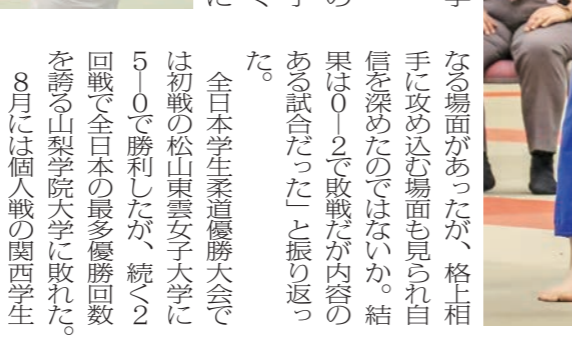
高川学園高校が小外刈と袈裟固の合わせ技で勝利し、5-1の圧勝で3回戦へ進んだ。続く3回戦の摂南大学戦では、2-2の内容負け(一本の数で1-2)でベスト8となった。

6月の全日本学生柔道優勝大会では、初戦の日本経済大学を4-1、2回戦の千葉工業大学を5-1で破り3回戦へ進んだが、今大会3位の東海大学に0-7で敗れた。その中で、2回戦で73kg級の生田聖空(てが)が、スポーツ科学部2年、大阪・昇陽高校)が初めて団体戦に出場し、100kg以上の相手に大内刈りから横四方固で一本勝ちし印象を残した。

生田監督は「池田は優勝と一本勝ちで内容が良く、思い切って起用した手際は結果を出した。全日本で3試合を戦えたことは、選手にとって大きな経験」と振り返った。

関西学生女子柔道優勝大会 / 全日本学生柔道優勝大会

柔道部女子は関西学生柔道優勝大会で昨年の全日本インカレ準優勝の明治国際医療大学と互角に渡り合う激闘。0-2で敗れたが勝敗の行方が大将戦までもつれ込む熱戦を演じた。



女子は0-4で敗れた。増子和奏(わかな、体育学部4年、明治国際医療大学)と2年連続1回戦で対戦。先鋒・原田詩依菜(しえな、体育学部4年、大阪大敬愛高校)は有効で敗れた。

将・日高愛理(ひたか、体育学部4年、静岡・藤枝順心高校)が中堅石塚さつき(さつき)とスポーツ科学部3年、同が引き分け、互角の勝負を演じた。増子、原田は互角の強い相手にポイントを取らせず苦戦。石塚は以前は弱気にならぬ場面があったが、格上相手と対峙する場面も見られ自信を失ったのではないかと、結果は0-2で敗戦だが内容のある試合だったと振り返った。

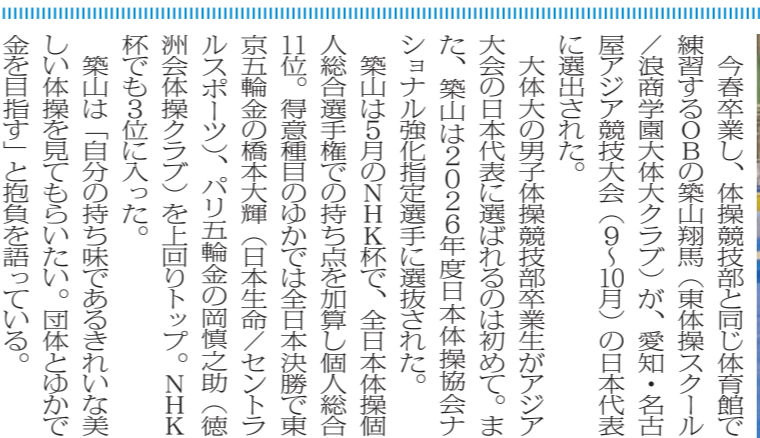
全日本学生柔道優勝大会では初戦の山梨学院大学に敗れた。8月には個人戦の関西学生柔道優勝大会に出場が決まった。松田監督は「8月の個人戦で出場権を獲得し、必ず10月の大会につなげてほしい。特に4年生にとっては最後の団体戦なので、集大成になるよう取り組んでほしい」と力を込めた。

山崎、横山がワニツ

瀬口も平行棒3位

関西学生体操選手権大会
西日本学生体操選手権大会

体操競技部男子は4月の関西学生選手権で団体総合19連覇。6月の西日本学生選手権は個人総合で山崎海音(かいと)、スポーツ科学部2年、鹿兒島・出水商業高校)が優勝、横山大輝(スポーツ科学部1年、岐阜・済美高校)が2位に入り、3年連続でフニーツ・フィニツシュを果した。



男子 関西インカレは個人総合で177点を独占した。西日本インカレは種目別で山崎がゆかと跳馬で優勝。横山はつり輪で優勝、大学初の3連覇を挙げた。団体総合は9位だった。山崎はつり輪もあん馬も全6種目を高いレベルでこなす。昨年より高い身体能力と筋力の強さが際立っていたが、1年間で演技の美しさが増した。「オリンピックを目指して体に入りたい」と話す逸材だが、練習に対する素直な姿勢が目立ち、周囲のアドバイスに真摯に答え成長した。横山も身体能力に優れ、高難度の技をこなす。山崎と同じく6種目高いバランスが取れている。横山とともにDASH選抜アスリートとして入学した瀬口寛太(スポーツ科学部1年、佐賀・鳥栖工業高校)は細身で繊細な演技が持ち味。西日本インカレでは得意のゆかのほか、平行棒でいずれも3位に入った。主将の鈴木流偉(るい、体育学部4年、福井・鯖江高校)も個人総合11位と健闘した。

OBの築山がアジア大会へ
今春卒業し、体操競技部と同じ体育館で練習するOBの築山翔馬(東体操スクール/浪商学園大体育クラブ)が、愛知・名古屋アジア競技大会(9・10月)の日本代表に選出された。大体の男子体操競技部卒業生がアジア大会の日本代表に選ばれるのは初めて。また、築山は2026年度日本体操協会ナショナル強化指定選手に選ばれた。築山は5月NHK杯で、全日本体操個人総合選手権の持ち点を加算し個人総合11位。得意種目のゆかでは全日本決勝で東京五輪金の橋本輝(日本生命/セゾナルスポーツ)、パリ五輪金の岡慎之助(徳洲会体操クラブ)を上回ってトップ、NHK杯でも3位だった。築山は「目の持ち味であるきれいな美しい体操を見せたい。団体とゆかで金を目指す」と抱負を語っている。

「西日本5位から下剋上を」

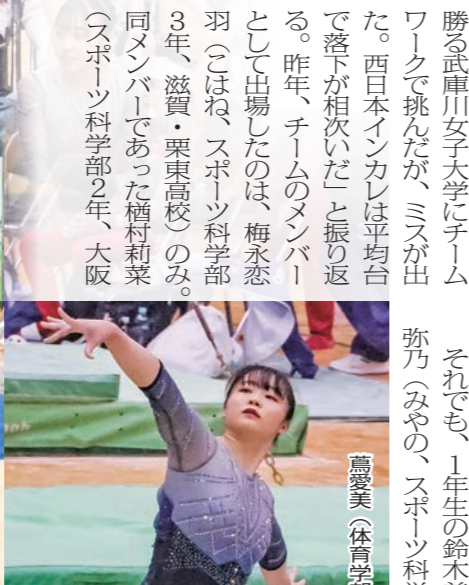
全日本で1部復帰を目指す

体操競技部

関西学生体操選手権大会／西日本学生体操選手権大会

女子 田原監督は「関西インカレは個々の力で勝る武庫川大学にチームワークで挑むが、ミスが出た。西日本インカレは平均台で落手が相次いだ」と振り返る。昨年、チームのメンバーとして出場したのは、梅永恋羽(こほね、スポーツ科学部3年、滋賀・栗東高校)のみ。同メンバーであった橋村莉菜(スポーツ科学部2年、大阪)

体育大学浪商高校の穴塚が、今回の結果に大きく響いた。それでも、1年生の鈴木美奈(みいな、滋賀・栗東高校)の活躍が、チームのメンバーとして出場したのは、梅永恋羽(こほね、スポーツ科学部3年、滋賀・栗東高校)のみ。同メンバーであった橋村莉菜(スポーツ科学部2年、大阪)



部、兵庫・甲子園学院高校)が跳馬で西日本インカレ2位、関西インカレ3位と健闘。まだ粗さは残るが脚力が強々、イナミックな演技が持ち味で4種目ともなごき、全日本を目指せる地方がある。高麗美(たけなみ、体育学部4年、大阪・四天王寺高校)は大学2年の9月に腰を手術し昨年11月に復帰した。1年次の全日本インカレ以来のチームメンバーとして出場し、西日本インカレでは得意の段違い平行棒で6位入賞するなど主将としてチームを引っ張った。安定感がある副主将の梅永(ゆめ、スポーツ科学部3年、三重・久居高校)、力を秘めている山本心菜(スポーツ科学部3年、石川・大聖門高校)らも、全日本を目指す。下剋上を起す」と喜んでいる。

部、兵庫・甲子園学院高校)が跳馬で西日本インカレ2位、関西インカレ3位と健闘。まだ粗さは残るが脚力が強々、イナミックな演技が持ち味で4種目ともなごき、全日本を目指せる地方がある。高麗美(たけなみ、体育学部4年、大阪・四天王寺高校)は大学2年の9月に腰を手術し昨年11月に復帰した。1年次の全日本インカレ以来のチームメンバーとして出場し、西日本インカレでは得意の段違い平行棒で6位入賞するなど主将としてチームを引っ張った。安定感がある副主将の梅永(ゆめ、スポーツ科学部3年、三重・久居高校)、力を秘めている山本心菜(スポーツ科学部3年、石川・大聖門高校)らも、全日本を目指す。下剋上を起す」と喜んでいる。

フェイバー成長

大黒柱の穴埋める

バスケットボール部 女子

全関西大学女子バスケットボール選手権大会／西日本学生バスケットボール選手権大会



バスケットボール部女子は4・5月の全関西大学女子選手権大会で準優勝。三次真歩(まいつぎ、まほ、体育学部4年、広島皆実高校)が敢闘賞、大上粹奈(おうえん、きよな、スポーツ科学部3年、同)がリバウンド王・アシスト王・優秀選手賞を受けた。チームの要のセンター、ア高校が右ひざを負傷し欠場。イェビドン・クレイス(イェビドン、大阪・関西学院大)との最終戦で、後半の勝負所で差をつけられ、52分で敗れた。しかし、ピンチは思わぬ副産物を生む。代役で出場した185センチのセンター・オヤレタ・フェイバー(スポーツ科学部2年、鳥取城北高校)が全関西では今一つだった。5月の全関西大学女子新人戦で最優秀選手と得点王を獲得し、優勝に貢献。6月の西日本学生選手権でも得点王、リバウンド王、優秀選手に。試合を重ねるにつれて見聞も深まり、大きく成長した。西日本インカレでは大黒柱のSF三次を教育実習で欠いて4位だったが、代役の木本夢菜(スポーツ科学部3年、京都府立総合運動場高校)が役割を果たし、成長をうかがわれた。アナリスト陣もチームを支えた。村左の監督は「課題は外からのストリートポイントの確率と三次、木本に続くポイントガード陣の奮起に期待している」。

バスケットボール部男子は関西学生選手権、西日本学生選手権が続き西日本インカレでは16強。身長216センチの留学生を擁する北信越地区の金沢学院大、北陸大学に勝利し秋に向けて確かな手ごたえをつかんだ。

留学生擁する相手に連勝

秋リーグに向け手応え

バスケットボール部 男子

関西学生バスケットボール選手権大会／西日本学生バスケットボール選手権大会



バスケットボール部男子は関西学生選手権、西日本学生選手権が続き西日本インカレでは16強。身長216センチの留学生を擁する北信越地区の金沢学院大、北陸大学に勝利し秋に向けて確かな手ごたえをつかんだ。

角島興(スポーツ科学部3年、滋賀・草津東高校)をはじめ、新戦力の高平エイリイ(スポーツ科学部1年、沖縄・豊城高校)らが活躍し勝利したが、2回戦では昨年インカレに出場し勢いのある同志社大に66-78で敗れた。続、西日本インカレは初戦で金沢学院大に105-59で勝利し、2回戦の長身選手を擁する北信越地区の強豪校を2試合連続で破った。3戦目は、昨年の関西1部リーグ優勝でインカレ8強の天理大と対戦。前半2クォーターを32-39で点差を折り返したが、3クォーターで引き離され55-88で敗れた。

此節監督は「長身選手がいるチームを攻略できたのは大きい。天理大戦は3クォーターのミスで一気に差をつけられた。2回戦の選手がいるチームに対し、いかに彼らを前に自分たちのチーム力を発揮出来るかが秋に向けて重要な」と課題を口にした。

今大会では大角がポイントガードとして活躍。秋に向けてのキーマンになる。また、コートセンターが高尾山田夏輝(スポーツ科学部2年、香川・尾道学院高校)や、1年生では身長190センチの永坂ヤリス正太郎(スポーツ科学部、名古屋たちばな高校)、今大会でも活躍した高平エイリイが主力をつけてきている。此節監督は秋に向けて、新戦力の台頭に期待を寄せている。



1部復帰逃すも バレーボール部 成長に手応え

広瀬逸実(体育学部4年、徳島・阿南光陽校)

男子 沼田真樹監督は「ス」と前向きにとらえる。大塚教員バレーボール部男子は4~5月の関西大リーグで7勝3敗、勝ち点17で2位。入替戦は関西学院大に1-3で敗れ、昨春以来となる1部復帰は果たせなかった。

沼田監督は「ス」と前向きにとらえる。大塚教員バレーボール部男子は4~5月の関西大リーグで7勝3敗、勝ち点17で2位。入替戦は関西学院大に1-3で敗れ、昨春以来となる1部復帰は果たせなかった。

沼田監督は「ス」と前向きにとらえる。大塚教員バレーボール部男子は4~5月の関西大リーグで7勝3敗、勝ち点17で2位。入替戦は関西学院大に1-3で敗れ、昨春以来となる1部復帰は果たせなかった。

沼田監督は「ス」と前向きにとらえる。大塚教員バレーボール部男子は4~5月の関西大リーグで7勝3敗、勝ち点17で2位。入替戦は関西学院大に1-3で敗れ、昨春以来となる1部復帰は果たせなかった。

沼田監督は「ス」と前向きにとらえる。大塚教員バレーボール部男子は4~5月の関西大リーグで7勝3敗、勝ち点17で2位。入替戦は関西学院大に1-3で敗れ、昨春以来となる1部復帰は果たせなかった。



黒木陽奈(体育学部4年、富岡・都城商業校)

1部昇格後最高の3位 得意のブロック炸裂

関西大学バレーボール春季リーグ バレーボール部女子は4~5月の関西大リーグで7勝4敗の3位。2024年春の1部昇格後、9位↓8位↓6位↓5位↓3位と最高の成績となった。

長江生監督は「今季のチームは、その日の試合でやらなければいけないことを明確にできるチーム。一歩ずつ積み重ねた結果」と評価する。

長江生監督は「今季のチームは、その日の試合でやらなければいけないことを明確にできるチーム。一歩ずつ積み重ねた結果」と評価する。

長江生監督は「今季のチームは、その日の試合でやらなければいけないことを明確にできるチーム。一歩ずつ積み重ねた結果」と評価する。

長江生監督は「今季のチームは、その日の試合でやらなければいけないことを明確にできるチーム。一歩ずつ積み重ねた結果」と評価する。



平山がベスト16 「全日本」切符つかむ

平山深太郎(体育学部4年、鹿島商業校)は、全日本学生選手権男子シングルス6人が進出。平山深太郎(体育学部4年、鹿島商業校)がベスト16に進出、全日本学生選手権大会出場権を確保した。

平山深太郎(体育学部4年、鹿島商業校)は、全日本学生選手権男子シングルス6人が進出。平山深太郎(体育学部4年、鹿島商業校)がベスト16に進出、全日本学生選手権大会出場権を確保した。



岡村、林が全日本学生室内 テニス選手権 生き残る

岡村那(体育学部3年、鹿島・鳳凰高校)は、全日本学生選手権女子シングルス5人が進出。岡村那(体育学部3年、鹿島・鳳凰高校)がベスト16に進出、全日本学生選手権大会出場権を確保した。

岡村那(体育学部3年、鹿島・鳳凰高校)は、全日本学生選手権女子シングルス5人が進出。岡村那(体育学部3年、鹿島・鳳凰高校)がベスト16に進出、全日本学生選手権大会出場権を確保した。



演技決勝は大体大対決 神山2連覇。1年生健闘

演技の決勝は大体大(体育学部4年、愛媛・北条高校)と近藤結(ゆい、スポーツ科学部3年、北条高校)組が優勝。神山は別の選手と組んだ昨年に続く2連覇を果たした。

演技の決勝は大体大(体育学部4年、愛媛・北条高校)と近藤結(ゆい、スポーツ科学部3年、北条高校)組が優勝。神山は別の選手と組んだ昨年に続く2連覇を果たした。

演技の決勝は大体大(体育学部4年、愛媛・北条高校)と近藤結(ゆい、スポーツ科学部3年、北条高校)組が優勝。神山は別の選手と組んだ昨年に続く2連覇を果たした。

4年生中心、勝負の年

幸先よく87回目優勝

ハンドボール部 男子



関西学生ハンドボール春季リーグ
ハンドボール部男子は
4~5月の関西学生春季
リーグを8勝1敗で終えて
4季連続87回目の優勝を
果たした。

今季は方に経験豊富な4年生が多く、下川真良監督は「勝負の年」と語る。主将の橋本太郎(体育学部4年・大阪体育大学浪商高校)はDFの要として幅広いポジションが得意で、春季リーグで最優秀選手に輝いた。チームの方針で各選手は2ポシ

ションをこなすことが求められ、橋本はレフトウイングに加え、レフトバックにも取組む。堀洗志郎(体育学部4年・高知中央高校)はチームのシューターだが、最上級生になって周囲とよく連携し、DFとの駆け引きもできるようになった。竹下颯斗(はやと、体育学部4年・大阪体育大学浪商高校)はゴールが取りやすくなり、原田浩天(ひなたか、

この3人に加え、門野空(くらの・そらた、体育学部4年・岡山理科大学附属高校)が食い込み、主力メンバーの大半は4年生だ。

中央に180センチ前後が4人そろって布陣となり、平均身長は大幅に上がる。得点力も増し、下川監督は「30点台中盤は高みで、失点をいかに30点以内に抑えるかがカギ」と話す。

全日本インカレの開催地は全国8ヶ所の持ち回りで大阪開催だった2018年に10回目の優勝を果たした。以後一巡して今年はその以来の大阪開催となる。下川監督は「前回優勝した大阪で勝負の年を迎えるのも嬉しい。選手は純粋にハンドを楽しみながら勝ち上がってほしい」と期待を込めた。

橋本太郎(体育学部4年・大阪体育大学浪商高校)

堀洗志郎(体育学部4年・高知中央高校)

門野空(体育学部4年・岡山理科大学附属高校)

レスリング

団体戦で圧巻の優勝

1部復帰



西日本学生レスリング春季リーグ
西日本学生レスリング春季リーグが
5月9日、10日、大阪府堺市の金岡公園体育館で開催されレスリング部は2部リーグで6大学に全勝、優勝し1部昇格を決めた。

昨年の2部降格から再昇格を目指す。初日、大坂体育大学浪商高校がバタール勝ち、5番手・瀬野悠斗(はると、同2年・大阪体育大学浪商高校)も勝利。6番手・石塚佑慎(ゆうしん、同2年・群馬市立天田高校)は勝利し、群馬市立天田高校は初日、2部リーグで全勝し、2部リーグから1部昇格を決めた。

最終戦の中京学院大学戦は、前戦で敗れた宇都宮が強選手に勝利するなど圧倒し、初日から6戦全勝で優勝し1部昇格を決めた。

湯元健一監督は「主将の茂野はさすがの戦いを見せ、宇都宮の勝利は急成長を感じさせた。他の上級生も1年生の活躍に刺激され結果を出したと振り返った。

現在がけで出場していない選手も競技復帰の目標が立ち、戦力が厚くなってきている。さらにスポーツ科学センターが選手のトレーニングをサポートし、近藤衣美部長が栄養面を支える。環境面では中高大一貫指導で選手モチベーションが高くなり、1部へ昇格したばかりだが「残留」ではなく「優勝」を狙っている。

茂野悠斗(体育学部4年・大阪体育大学浪商高校)

湯元健一監督(体育学部1年・大阪体育大学浪商高校)



宇都宮大学(体育学部1年・宇都宮大学)

湯元監督は、8月に開催される全日本学生選手権大会の9月の西日本学生選手権大会

松本陣(体育学部1年・大阪体育大学浪商高校)

ハンドボール部 女子

吉本新監督迎えて24連覇

中尾、加藤、多田がフル代表



ハンドボール部女子は4~5月の関西学生春季リーグで24季連続(中継ぎによる)47回目の優勝を果たした。

関西学生ハンドボール春季リーグ
リーグ戦は9戦全勝。最優秀選手に主将の東海華(あずま・このか、体育学部4年・千葉・昭和学院高校)、優秀選手に小林礼実(あやみ、体育学部4年・栃木商業高校)

リーグ戦は9戦全勝。最優秀選手に主将の東海華(あずま・このか、体育学部4年・千葉・昭和学院高校)、優秀選手に小林礼実(あやみ、体育学部4年・栃木商業高校)が選ばれた。

また、最終戦は関西学院大学に途中、逆転される場面もあり、27~24と僅差だった。今年2月に就任した吉本新監督は、3月に全国21大学が石川県に集まった合宿で2つの課題を感じたという。リーグの課題を物足りなさを、中尾監督(スポーツ科学部3年・京都・洛北高校)加藤真央(スポーツ科学部2年・千葉・昭

尾崎羽南(スポーツ科学部2年・山口・高水高校)

小林礼実(体育学部4年・栃木商業高校)

松本陣(体育学部1年・大阪体育大学浪商高校)

松本陣(体育学部1年・大阪体育大学浪商高校)



DASH選抜アスリート30人に科学的サポート

大阪体育大学は国際大会、または国内大会で極めて高い競技実績を持つアスリートを大阪体育大学DASH選抜アスリートとして認定。スポーツ科学に基づいた質の高いサポートを実施している。今年度は新たに1年生7人を認定し、DASH選抜アスリートは過去最多の30人となった。

DASH (Daitaidai Athlete Support & High Performance) は、高いレベルで活躍するアスリートと指導者を育成・サポートするプロジェクト。DASH選抜アスリートに対し、大学を挙げてスポーツ科学センターによる、AT、S & C、心理、栄養、測定評価などの科学的サポートを実施します。また、全国に先駆けて設置されたクラブ統括部局のスポーツ局がキャリア支援部、学習支援室など各部局と連携し、キャリア、学修、ライフスキルなどの各分野で支援する。

DASHに認定された1年生は次の通り。
ハンドボール部女子 石田莉菜▽同男子 清水高空▽陸上競技部 鈴木彩夏(やり投げ)▽体操競技部男子 横山大輝、瀬口寛太▽レスリング部 辻田陽咲、庵野琥土朗

スポーツナビ大阪体育大学公式情報



大阪体育大学の各クラブの活躍は、スポーツナビの本学公式情報で記事、写真を掲載し、広く社会に向けて情報発信しています。こちらのQRコードからご覧になれます。



和田、上甲、松山がV、男女13種目で表彰台

水上競技部

関西学生チャンピオンシップ水泳競技大会

第14回関西学生チャンピオンシップ水泳競技大会が、6月20、21日、大阪市のAsue大阪プールで開催され、和田晃太郎(スポーツ科学部3年、大阪・太成学院大学高校)が400メートル男子個人メドレー、上甲陽輝(じょうこう・はるき、スポーツ科学部3年、大阪・向陽台高校)が男子200メートル自由形、松山優杏(ゆあん、スポーツ科学部2年、兵庫・神戸野田高校)が女子50メートル自由形で優勝した。高野朱理(あかり、スポーツ科学部2年、富山・高岡第一高校)は女子100メートル平泳ぎで大会新記録をマークし2位になるなど、4種目で2位、6種目で3位と男女合計13種目で表彰台に立った。



高野朱理(スポーツ科学部2年、富山・高岡第一高校)



上甲陽輝(スポーツ科学部3年、大阪・向陽台高校) 和田晃太郎(スポーツ科学部3年、大阪・太成学院大学高校) 松山優杏(スポーツ科学部2年、兵庫・神戸野田高校)

女子 女子は松山が50メートル自由形で初日から躍動、26秒99を記録し優勝した。松山は短距離を得意とするスプリンターで前半からハイスピードの泳ぎが特徴で、今は後半にスピードを落さないようペース配分に気を付けて泳いでいるという。自由形の100メートル自由形でも58秒04で3位になり2日連続個人種目で表彰台に立った。100メートル平泳ぎの高野は、自己ベストを更新し大会新記録となった高野は、記録が

録となる1分09秒41で2位、日本選手権でも優勝を進めるレベルの成績を出しながら、2位となった高野は、記録を出せたことには嬉しいが、優勝選手は目の大会で競り勝った相手に敵しすぎた、と喜びと悔しさが交錯する心境を語った。松山、高野はそれぞれ7本を泳ぐハードな日程のなか、4×100メートルリレー、4×100メートルメドレーでも活躍し、チームの2位に貢献した。また、松山、高野と同じ2年生の国本海梨(かいり、スポーツ科学部2年、大阪体育



国本海梨(スポーツ科学部2年、大阪体育大学附属高校) 井藤星(スポーツ科学部3年、愛媛・新田高校) 岡崎一(スポーツ科学部3年、徳島・徳島東高校)

男子 男子は初日和田が400メートル個人メドレーで4分23秒42を記録し優勝。バタフライ、背泳ぎが得意な選手で、昨年4位だった。得意な平泳ぎでもトップに立ち、最後の自由形でも逃げ切った。和田は平泳ぎで勝負をかけた、自分の展開

で泳ぎ切れたと胸を張った。2日目の4×200メートルリレーでチームの3位入賞に貢献した。続いて昨年から活躍の目立っていた松山が、200メートル自由形決勝に登場し、1分51秒02で優勝。持久力をつけるため長距離練習を取り入れ、その

の成果で後半に崩れず安定感が増しているという。4×100メートルリレー、4×100メートルメドレー、4×200メートルリレーにも出場しチームは3位。自問で7本を泳ぎ切りタフネスぶりを見せた。2日目は井上輝星(きら、体育学部4年、福井工業大学附属福井高校)が200メートル個人メドレーで自己ベストを1秒以上更新する2分03秒87で2位。優勝した選手とは最後まで競り合い僅か0秒14の差だった。リレー種目にも全て出場しリレーとしてチームを牽引した。

大体大の学生アスリート心身サポート 支援体制は全国トップ級

大阪体育大学では、学生アスリートが安心して競技と学業に取り組めるよう、身体と心の両面から支えるサポート体制を整えています。診療、競技復帰、トレーニング、メンタルケアまでを学内で一貫して受けられる環境は、本学ならではの大きな強みです。



身体面では、「診療所」「ATルーム(アスレティックトレーニングルーム)」「S&Cルーム(ストレngth&コンディショニングルーム)」が連携し、学生を支えています。



学内診療所では、スポーツ整形外科と内科のスポーツドクターが診察、診断、投薬を行います。学内診療所は医学部を除けば全国の大学でも極めて珍しく、併設のリハビリテーション室では理学療法士が医師の診断に基づいてリハビリを実施。けがの初期対応から競技復帰まで切れ目なくサポートしています。

ATルームでは、アスレティックトレーナーの専門資格を持つスタッフが競技復帰に向けたトレーニングやリコンディショニングを指導。S&Cルームには本格的なトレーニング機器がそろい、ストレngth&コンディショニングの有資格者が競技力向上を科学的に支援しています。



メンタル面の支援も充実しています。学生相談室・スポーツカウンセリングルームは、日本で最初に開設された常設のアスリート向け心理相談室です。公認心理師の資格を持ったカウンセラーが複数在籍して、学業や人間関係、進路など学生生活全般の相談に対応。さらに、日本スポーツ心理学会認定スポーツメンタルトレーニング指導士の資格を持つスポーツ心理の専門家も在籍し、試合で実力を発揮できない、けがによる不安、競技への悩みなど、アスリート特有の課題にも寄り添っています。年間約500件の面談を実施し、多くの学生の成長を支えています。

「我慢の春」3連敗で12位 控え成長「実りの秋」目指す

ラグビー部



ボールを持ち突進する 森西貴太(スポーツ科学部3年、兵庫・科学技術高校)

関西大学ラグビー春季トーナメント ラグビー部は、6月の関西大学春季トーナメントで3連敗し、12位。長崎正巳監督は「最悪の結果だが、春は我慢の時期。夏合宿で勝ち切って自信を取り戻し、秋の入替戦勝利につなげたい」と前向きだ。



高野陽介(スポーツ科学部3年、徳島・徳島東高校)

ランカーの巨匠(体育学部3年、大阪産業大学附属高校)が負傷するまで主力が欠けた。4年生の多数が教育実習と重なったこともあり、春は3年生以下のメンバで臨み、関西大学に10-73、摂南大学に5-53、環太平洋大学に21-57で敗れた。苦戦の中での光明は控え、だいた選手が台頭した。いざいざもトップの川西高樹(スポーツ科学部2年、大阪桐蔭高校)は攻守にアクレシブで、古庄勝太(スポーツ

科学部3年、大阪産業大学附属高校)・北村真仁(スポーツ科学部2年、兵庫・科学技術高校)はスクラムを強さを見せた。ロックの高崎輝(スポーツ科学部2年、大阪・東住吉高校)はコンタクトエリアで身体を張る続けた。長崎監督は「シーズンを乗り切るためにはアスコッド38人が必要だが、十分の候補になる動きをみせたい」と評価する。今季のテーマは「切り切り、勝ち切り、そしてアリーグ格へ」。スラムはアリーグ



高田大(体育学部4年、岡山・高岡高校)

目吉の他、バックスの山内デビス(スポーツ科学部2年、大阪・成城高校)、フィオウ・オネ(スポーツ科学部2年、日本航空高校)ら、と悪戦のAリーグ復帰に向けた書き真を描いている。



小野田武流(体育学部4年、大阪常務学園高校)

硬式野球部 男子

「秋の実リ」

痛恨のサヨナラから4連勝

阪神大学野球春季リーグ

硬式野球部男子は最後に力尽きた。松平一彦監督は「十分優勝の可能性はあったが、あと少し届かなかった」と悔やむが、秋に2019年春以来の優勝への期待を抱かせる春季リーグだった。

7勝3敗、21ポイントで2位。昨年の春4位、秋5位の低迷から上昇気流を描いた原動力は、エース高田純誠(じゅんせい)。



亀川晋(教員部3年、和歌山県立高等学校)



斎藤辰生(体育学部4年、兵庫東洋大学付属星翔高等学校)



松岡映人(体育学部2年、岡山倉敷南高等学校)

予感の2位



高田純誠(体育学部4年、兵庫報徳学園高等学校)

山世園(体育学部4年、下関国際高等学校)



し、開幕から3連勝。4戦目で関西国際大学に逆転サヨナラ満塁本塁打を浴びて敗れたが、3勝1敗で、全勝の天理大学との首位攻防戦を迎えた。大体大は主将の山下世虎(せいく)と、体育学部4年、山口下関国際高校のタイムリー二塁打などで20とリードし、高田が九回一死まで完封ペース。しかし、2点を奪われて延長となり、十回にタイブレークで3-4と逆転サヨナラ負けを喫した。ロッカールームでは涙を流す選手もいて、勝負ありの雰囲気だった。ここからの粘りが昨年までと違っていた。2日後の第2戦は先発の渡邊に加え、工藤樹(スポーツ科学部2年、宮崎・延岡学園高校)が初登板で五回を投げ、高田がロングリリーフして3-1で勝った。以後、大阪電気通信大学に2連勝。甲南大学の初戦にも勝ち、4連勝。最後は甲南大学に2戦目で敗れて優勝を逃したが、チームの変化の兆しは十分感じられた。個人賞では、敢闘賞に2完投(2完封)を含む3勝0敗

で防御率1.21の高田が2回目の選出。勝負強い打撃でチーム最多の6打点を挙げた山下は初選出となった。ベ

スライムでは捕手の村崎心(しん) 体育学部4年、兵庫・東洋大学付属姫路高校)、三塁の松岡映人(スポーツ科学部2年、岡山・倉敷商業高校)、外野手の亀川修吾(教員部3年、和歌山・星林高校)が初めて選ばれた。

松平監督は春季リーグで健闘できた要因として、守備力の向上を挙げる。先発は昨秋の16個から5個に激減。開幕直前に遊撃から三塁にコンバートされた松岡、遊撃・森翔斗(じょうと)く、スポーツ科学部3年、兵庫・明石商業高校)が堅実に守った。

大体大は教員採用試験や就職活動に専念するため、春で引退する4年生が多いが、今年にはエース高田、正捕手の村崎、4番の斎藤辰生(じんせい)く、体育学部4年、東海大学付属熊本星翔高校)らが部に残る。

松平監督は「責が少しずつ降りないものを埋めるかが結果につながる。勝負の秋に向け切磋琢磨が続く。」

硬式野球部 女子

3連続完封劇から一転

春のインカレ誤算の4位

全日本大学女子硬式野球春季大会

硬式野球部女子は5月に高知県安芸市市営球場などで行われた全日本大学女子硬式野球春季大会の準決勝で福井工業大学に1-3で敗れた。3位決定戦でも尚美学園大学に1-4で敗れて、4位に終わった。

予選からチームは好調。初戦は都賀(みやこ)・きょうか、スポーツ科学部3年、鹿兒島・神村学園高等部)が日本ウェルネススポーツ大学を完封し、15-0で4回コールド進出。2戦目は谷倉(あお)い、教育学部2年、京都外大西高校)が前年の覇者の仙台大を完封し、5-0で快勝した。



谷倉(教育学部2年、京都外大西高校)



尾玉権延(体育学部4年、福井工業大学附属福井高等学校)

井美(教員部3年、岐阜第二高等学校)



渡部雅(体育学部4年、京都外大西高校)

7回一死二塁から三塁口で痛恨の失策。セーフィンスクイズと同点となり、タイムレックの末に敗れた。横井監督は「六回裏までリードして決勝を計算しただけに残念」と悔やんだ。ただ、いい意味で計算外

で5-0、横井光治監督が「出ますぎ」と振り返る3連続完封で準決勝に進出した。準決勝も先発・谷倉が福井工業大学を5回まで奪封。2番手・都が六回を無失点に抑えて1-0でリード。しかし、七回一死二塁から三塁口で痛恨の失策。セーフィンスクイズと同点となり、タイムレックの末に敗れた。横井監督は「六回裏までリードして決勝を計算しただけに残念」と悔やんだ。ただ、いい意味で計算外

だったのが投手陣の踏ん張りだ。大黒柱のエース柏崎咲和(現職野・ヤイアンツ)が抜け、ある程度の失点を覚悟し打線に奮起を促し臨んだ大会だったが、谷が、充実した戦力で大会連覇を果たした仙台大を完封。谷は速球と

同じ腕の振りでもチェンジアップを投げ、三振を取れる点が強み。また、大会前の練習試合では打たれる場面もあった清井、都が成長。左腕の清井は冬ではかなり速い最速117km/hの速球が魅力で、昨秋にけがから復帰した都は変化球を制球良く低めに集める。8月9日の全日本大学女子硬式野球選手権大会に向け、横井監督は2つの課題を挙げる。「まずはノーエラーを目指してもう一度守備を固める。また、女子野球では最近最速100km/hを投げる投手が現れ始めている」とい、「速い速球に負けないスイング力を身に付けたい」。この2つの達成が5年ぶりの優勝のカギとなる。

横井光治監督が侍ジャパンコーチに



横井光治監督

横井光治、硬式野球部女子監督が8月に台湾で開催される第10回WBSC女子野球ワールドカップのグループステージBで侍ジャパン女子日本代表のコーチを務める。

横井監督は2023年アジアカップからコーチを務め、2年前はワールドカップで7連覇、昨年はアジアカップ4連覇に貢献した。主に走塁、チーム全体のコーチとして、中島紗紗監督を補佐する。グループステージBに向け、「ファイナルにつながる大事な試合であり、当然だが1位通過を目指す。中島紗紗監督が目指す、細かいサイン・ミックスの両方を選手に理解させ実行する野球をさせていきたい」と抱負を語っている。